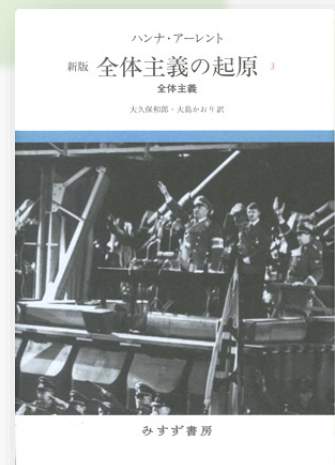


法学部 教授 前川亨

「読書の楽しみ」という表現があるが、読み続けるのが苦しくなるような書物も中にはある。政治哲学者ハンナ・アーレントの『全体主義の起原』もその一つである。全編を通読するのが難しければ、その白眉というべき第三部「全体主義」を読んでもらいたい。読み進めるうちに、身の毛がよだち、暗澹たる気持ちになってくるに違いない。

なぜそのような怖く苦しい思いをしてまで、これを読むのか。それは、この「恐ろしいこと」が二度と繰り返されないためには、アーレントがいうように「恐ろしいことを考えつづける」ことが必要だからである。

ヤスパースの指導の下、『アウグスティヌスにおける愛の概念』で学界に登場した若きアーレントが、22年後には、現世の地獄絵というべき『全体主義の起原』を著さねばならなかったことは余りに痛ましい。「かつてそこに人が生きていた」という記憶の一切を消し去り、「忘却の穴」に落とし込む秘密警察。人間を「パブロフの犬」に、「つまり動物ですらないものに変える恐るべき実験」の実験室としての強制収容所。「生きる資格のない者」を「絶滅」させる「最終解決」——。救いのない禍々しい世界が描き出された末、しかしその最後の場面に至って、「始まりが存在せんがために人間は創られた」というアウグスティヌスの言葉が天籟のように響いてくる。絶対零度の極北の地点にあってなお、アーレントが微かに見出した一筋の光明がこれであった。



全体主義 新版 / ハンナ・アーレント [著]; 大久保和郎, 大島かおり 訳
みすず書房, 2017.8 (全体主義の起原 3)

本 館 K/311/A68/3

神田分館 /311/A68